

川端康成学会 第176回例会

日時 12月22日(土) 14:00より

場所 鶴見大学1号館501教室

*研究発表

「「雪国」における島村の自分探し ― 駒子とのかかわりをめぐって」

二松学舎大学大学院 博士後期課程 何 曉 芳

「川端康成と死について」

クラーク記念国際高等学校教諭 中 嶋 一 裕

*閉会の辞

川端康成学会会長 片 山 倫 太 郎

司会 山 田 愛 美

*当日受付にて、参加費 500 円を頂きます。ご了承ください。

*当日受付にて、年会費の納入をお受けします。併せて、維持会費もよろしくお願ひいたします。

*例会終了後、懇親会を予定しております。奮ってご参加ください。

*当日、12時より1号館505教室にて理事会を開催いたします。常任理事の皆様はお集まりください。

*今後の例会の開催予定日をお知らせいたします。第177回例会は4月を予定しております。上記の日程は変更になる場合もございますので、ご了承ください。

なお、例会での研究発表希望者を随時募集しております。ご希望の方は事務局長・堀内京 (kawabata.y.ac.1970@gmail.com) までご一報いただけましたら幸いです。

*会員の皆様には「年報」31号(2016年)までのバックナンバーを送料込み1部500円で販売致します。最新号と前号は会員価格2,000円で販売致します。なお、在庫切れの号もありますので、詳細は事務局長・堀内京 (kawabata.y.ac.1970@gmail.com) まで、お問い合わせ下さい。

*例会についてのお問い合わせは下記にお願いいたします。

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学人文社会科学部言語文化学科 田村充正研究室

電話: 090-6180-3670 メール: kawabata.y.ac.1970@gmail.com

【発表要旨】

*何曉芳（二松学舎大学大学院 博士後期課程）

「雪国」における島村の自分探し — 駒子とのかかわりをめぐって」

「雪国」において島村は「鏡」的な働きをしているとよく論じられてきたが、そのような「雪国」論では、島村が雪国へ行くことで「真面目さ」を呼び戻す目的が見落とされていると考えられる。鏡の中の駒子と葉子が非現実的な美に満ちているため、島村は鏡の中の駒子たちに憧れている。一方、実在する駒子は島村にとって、鏡のような存在である。島村は自分と同じような一面を持つ駒子の姿を見つけるのである。苦しい生活にもかかわらず、駒子の真面目に生きようとする力強さに島村は感動を覚え、様々な思考や反省を行い、駒子及びその日常的な生活や雪国の自然風物に接近しようとしていると考えているのである。

*中嶋一裕（クラーク記念国際高等学校教諭）

「川端康成と死について」

『末期の眼』と題された随筆において、川端は芥川が自殺前に綴った『或旧友へ送る手記』の中の言葉、「僕の末期の目」という言葉に着目する。川端はこの随筆において、終始自殺に対する批判的な論を繰り広げる。しかし他方で、「あらゆる芸術家の極意は、この「末期の眼」であろう。」と述べるように、芸術家において死が不可避なものであることをほのめかす。死という芸術家が直面する問題。芸術家を書くことに際して伴う死の体験、川端における「末期の眼」、そしてそこから見える川端のエクリチュールを、ブランショ、ヴァレリー、ロラン・バルトといった人物たちの記述に触れながら明らかにする。また、彼の記述行為における源泉が如何にして彼の著作に流れついているのか、『眠れる美女』等の小説作品を取り上げることによって、明らかにしていきたい。

【会 場】鶴見大学 1号館 501 教室（〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見 2-1-3）

【アクセス】JR 京浜東北線 鶴見駅西口下車徒歩 5 分、京浜急行 京急鶴見駅下車徒歩 7 分

*1号館は、総持寺参道の左手です。参道正面より入っていただくとわかりやすいと思います。

